

社会福祉法人 佐 啓 会



佐 啓

社会福祉法人 佐 啓 会 ふる里学会

〒 2 9 0 - 0 2 6 5 市原市今宮 1 1 1 0 - 1

☎ 0 4 3 6 - 3 6 - 7 6 1 1

発行者 田 見 吉 英

編集者 三 股 金 利

岐 路

三 股 金 利

早いものでこの世界に身を置き二十年が過ぎた。いい加減な学生生活に浸りながら卒業を迎え、とにかく就職だけはなくてはならないながらも、何を一生の仕事とするかなどと真剣に考えたことはなかった。ただ今ほどではないにしても不景気ではあった。結局市内にあった袖ヶ浦福祉センターにお世話になることになったときの安堵感と不安感は忘れられない。

何せ福祉は門外漢、そこで働く人達は哲学が宗教家、院長にいたっては僧侶を聞いた仙人のような人に違いない。ここに勤めたら私の浪費癖や、ちやらんばらんのいきあたりばつりの性格も治るだろう。安心して最後の酒盛りをしたところが火がでた急遽車に運ばれた始末。

ようやく四月がやってきた。研修の二十日間をすぎたと思ったら翌日は給料日。いい職場だ。しかし、消費を口指す私は、車はとりあえず家に置き（売ってしまわなくてよかった）自転車と物置から出して配属先の奥に向かった。

「あなた朝食まででしょ。若くもない宗教家はみんなと一緒に食べなさいと勧める。済んでいることを伝え丁寧に辞退し、事務所へ入った。小さな部屋である。ここにはすでに、白髪の哲学者。後に大

変お世話になることになった当時の係長であった。そのうち職員が続々とやってくる。なんとみんな車ではないか。さらに新人もすべて。自転車は哲学者の係長と私の二人だけであった。順応性の高い私は翌日から車に乗り替えた。

やがて日常の業務が始まり、地下足袋と長靴を履き現場へと入っていく。百録育ちの体育会系はわが意を得たり。現場の担当は哲学者でもない、サングラスの強面の先輩職員が。（実は優しい）

その後は利用者ととの楽しい日々。時には院長先生（現在の古川理事長）も参加の全体作業。夜には慰労会があり一杯。こうして何も知らずに空想していた宗教家も哲学者も仙人も姿を隠すこと無く同時に私の消費志向の強い意志はまたしても三日坊主で終わりを告げた。

その後十五年間、事業団の三カ所の施設でお世話になり、多くのことを教わられた。後は想像におまかせしよう。エスカレーターする俗人は思ひ出がいっぱいである。

「面白い仕事をしよう」

こんな施設長の言葉から始まったふる里学会も五年が過ぎた。オモシロイのかよくわからない夢中のうちの月日であった。簡めて

十年。

福祉を取り巻く環境は様変わりを見せ、研修や各種会議でも構造改革に盛り込まれた内容にどう対応していくのか、大きなテーマとなっていた。人権擁護・虐待から契約・介護保険・サービスの効率化と質の向上。地域福祉・競争原理、サービス利用者と同等な関係へ。評価に傾いていた施設が、評価される側に。勉強不足で不明な点は多い。しかし変革は目の前。

人権侵害が大きく報道され、入所施設に対する批判は、地域で生活する理想との対比で高まるばかり。パンドラの箱に手をかけてしまったのは確かに入所施設に違いない。反省すべき点も多い。けれども入所を希望する人もまた後を断たない。そして応えようとする私達。地域生活の理想は否定できないが、その整備も発展途上の段階である。

作業指導・生活指導の「指導」という考えに基づく自立や、障害を軽減する目的のための手法、治療教育という専門的機能（私がそう解釈していただけなのか）にかわって、人権の擁護や生活の援助へと考え方も変わり、自己選択がキーワードになってきた。理念が時代に合わなくなってきたという転換でなく、外圧によってスタイルを変えていく過程に落とし物をしたような感覚があるのは私だけであろうか。

ふる里学会では、三年毎に入所を継続すべきか、異なる生活が可能

能なのか、措置機関のケースワーカー。保護者を交えて話し合いを続けている。ほとんどの保護者の意見は入所の継続希望である。本人の意向が確認出来る人は少ない事も含め、六年目を迎え、再び新しい話し合いに臨まなくてはならない。

生まれ育ったところは、誰であつても忘れられることはない。が一方で住めば都というところもある。現代の生活はボーダレス。エリアを決められて生活するということもおかしい。これが第二の「ふ」と批判に對する小さな抵抗を試みたい気持ちである。

二十年を節目に
(指導課長)

日 凡 し 懐 秋

関 原 祐 治



兄から教わったことがたくさんあります。僕は時々してしまいがちですが、自分のことだけを考えてズルをしますが、兄は僕が何かをたのむと、すぐ「いいよ」と言い返す。とても優しいし、ウソをつきません。

将来、兄が自立していくためには、社会的にもいろいろなかべにぶつかったり、いくつものハードルを乗り越えていかなければならないと思います。普通の人が「一」の力で乗り越えられるものでも兄にとっては、「五」や「十」の力を出さなければならぬでしょう。でも兄一人では無理だと思ふので、お父さんとお母さんの信頼の中で、すぐ上の兄といつしよに力を貸してあげたいと思っています。

こんなことを考えるのは、兄が障害を持っているからであつて、そうでなければ僕は何も考えない弟だったと思います。

兄には、今のままの優しい兄でいてほしいです。

関 原 恵 治・弟 小 6



ありがとう、ふる里学舎

國學を通しての清掃活動

霜崎 博之（上郷）

東海学区の皆様は、「ふる里学舎」をご存じですか。

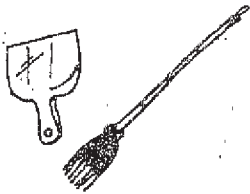
時代に応え、社会が求める福祉サービスを必要とする方たちが、心身ともに健やかに生活すること願って平成5年度に今富の地に誕生。今富といっても、東関東自動車道館山線サービスエリアとは目と鼻の先であるので、今富を指していくと到達できないかも知れません。海保公園、サービスエリア海保を目標に行けば、広い敷地の中に外壁が黄色い建物であるのですぐ発見できる事でしょう。知的障害者居住施設「ふる里学舎」は、平成5年度開所から早5年。今では入所60名、通所22名の若者が、障害による社会的不利を乗り越えて、指導員の援助を仰ぎながら日々の生活・作業体験をとおり、基本的な生活習慣、情緒の安定、社会的自立を目標にいろいろな取り組みの実践をしております。同じ地域に住んでいる一人として、学舎の姿勢、ガラス張りの運営等とても好感が持てます。地域にもボランティア活動をおして貢献。今では月一回の割合で、海保公園通りの草刈り、公民館の草取り、海保神社の清掃、道路の空き缶拾い等々、指導員と寮生の共同作業として定着。地域とともに歩んでいきたいとの里見吉英氏（中谷出身）の生き方、こだわりの一端を指導員、又、ハンデイのある若者達みんなの汗して働く姿から感じ取れて、体が熱くなる思いです。

ありがとう、ふる里学舎

この輝きをいつまでも・・・

ふる里学舎では、月一回地域清掃を実施しています。

今回、地域で発行された新聞（青少年健全育成東海小・中学区民会議4号）に掲載された霜崎博之さんの文章を転載させて頂きました。これからも地元の人達に少しでも貢献できる活動を心がけ、実施していきたいと思ひます。



子供たちの

楽しい作業

小西 公子

今年に入って障害者施設の陶芸のお手伝いをするようになりました。姉崎の町から少し離れた所に、私の行く「ふる里学舎」があります。まわりは緑にかこまれた、空気がおいしく感じられるような所で、庭木は良く手入れされ、草花が咲いてとても環境の良い所です。初めてのことで施設の子供達と上手に接することが出来るか心配していましたが、行ってみるとそれが杞憂であることが判りました。

朝九時過ぎにはもう朝礼が終わっていて、作業が始まっています。それぞれ自分にあつた仕事で粘土と向き合っています。「おはようございます」と入って行くと「おはよう」と大きな声と笑顔で迎えてくれます。わざわざ席をたつて「おはよう」と握手で歓迎してくれる子もいます。作業中に時には他の作業の子がエスケープして来て、先生がその後を追いかける・・・と見ていてほほえましい光景ですが、先生には御苦労なことでしょう。お昼には食堂で一緒に御馳走になるのですが、「うまいね、おいしいね」と言つて本当においしいものに食べる子もいれば、黙々と食べる子もいます。きれいに食べ終わると自分の食器は自分で片付けてゆきます。きちんと躰をして育てられた親御さんや先生方の努力が目に見えるようです。お昼休みには、三三五五好きなことをして過ごしています。グラウンドで球技をしたり作業所でおしゃべりしたり・・・私のまわりにも何人か集まって来て、私の身上調査が始まります。

「何処から来たの?」「子供は何人?」

「美容院は何処へ行くの?」等々。時に野菜の収穫に行きあうと新鮮野菜を買うことができるという役得の付いたボランティアの一日です。とにかくみんな純真で人なつこくてかわいいう子供達という感じがします。みんな外からの訪問者が大好きなのではないでしょうか。出来る限り行つてあげたいと思ひます。

（ボランティア）



編集後記

東関東自動車道に市原インターからのり、下り方面に走らせていると防音壁とのわずかな隙間に、建物自体がハンカチーフを振っているかの如くチラリとふる里学舎が姿を見せる。が、そのイメージカラーとなつていた黄色が五年を経て落ち着いたブラウン系にお色直しをした。

女子棟の建設も着々と進んでいる中自分も新しい波にどうにか同調できれぱと思つている。

佑啓三十一号をお届けします。

遠山 貴子